

今村文吾と晩翠堂

橋本紀美

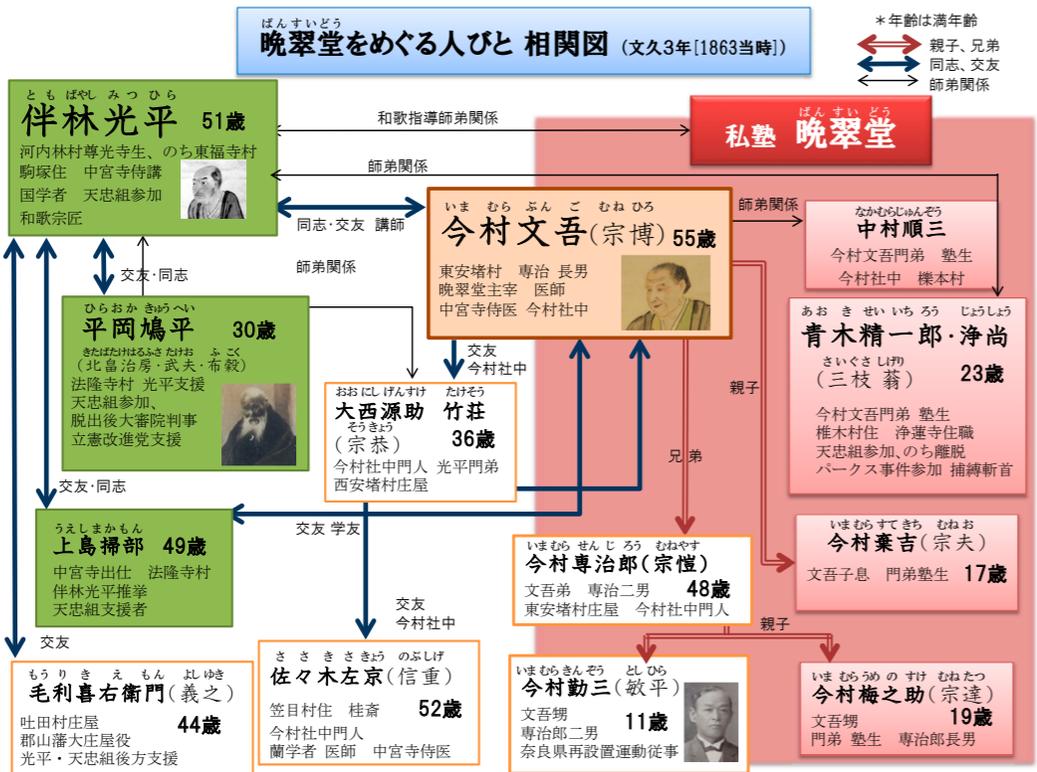
「谷三山研究会」より
会場：奈良県立大学 時：2019年7月5日

今村文吾（1808～1864）という人物、それから晩翠堂とはどんな実態があるのか見ていかなければいけません、実は臆気なイメージしかないため、できるだけ実態に近づきたいというのが今日の目的です。

はじめに

「谷三山の門人で安堵村に二人の医者がいる」としてありますが、二人のうち一人は今村文吾であろうというところで、まだ「文吾である」と言い切れないところです。今日は今村邸、安堵町歴史民俗資料館に残る史料を見ながら、その実態を具体的にお示しできたらと思います。

2019年3月に『知の系譜——今村三代文吾・勤三・荒男——』という本を安堵町から発行し、本書に携わった研究員の方々が史料を発掘していただけのこと成果となっていますが、それらも含めて、わかったことを整理してお示ししたいと思います。



【資料1】晩翠堂をめぐる人びと 相関図 (文久3年 [1863] 当時)
天忠組=天誅組

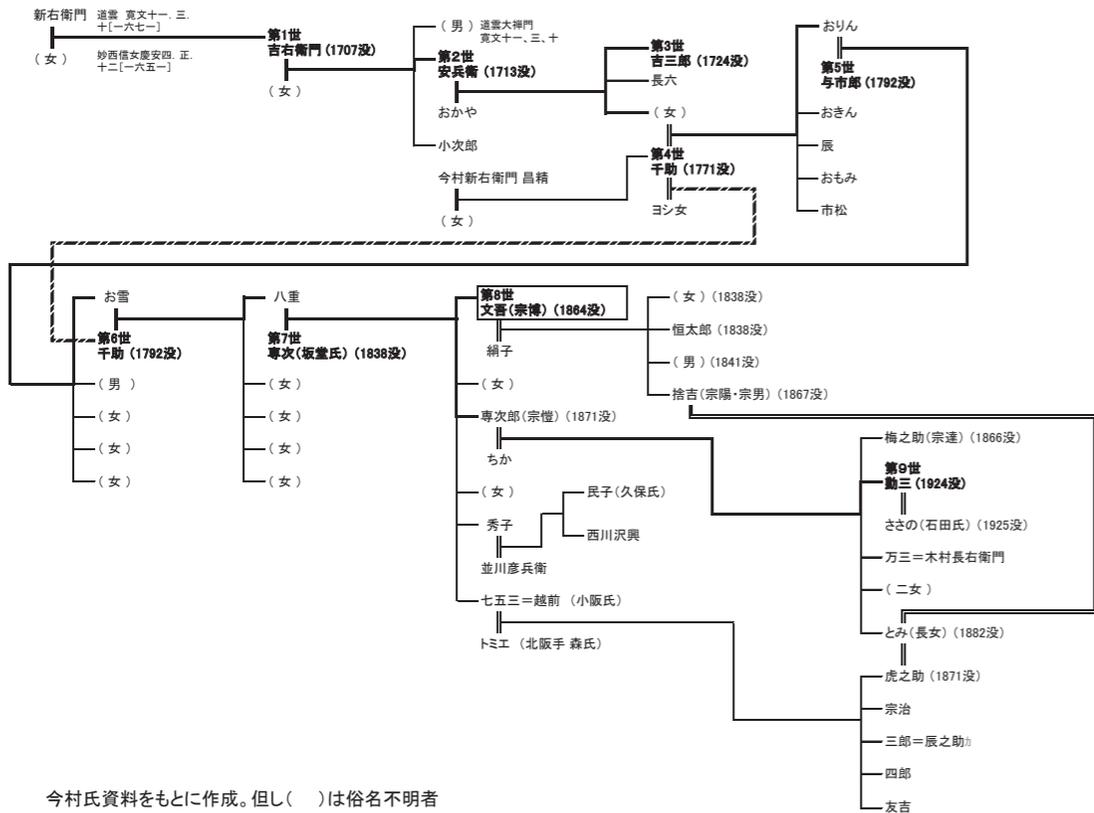
今回の着眼点

- 1 まず一つは、文吾がどういう人物かという点の見直しです。『大和人物志』に表わされた文吾は、とても勇ましい勤王家というイメージが一人歩きしている印象ですが、これが本当かということです。
- 2 それから二つ目、先に申しましたが、安堵村の谷三山の門人であるという事を示す史料があるかどうか、まだ不明である点です。
- 3 三つ目に、京都から戻り晩翠堂を開いて活動したという点も、その実態はどうだったのか、実際にどんなふう動いていたのかという点も、まだわからないところです。それに介在する人物が二、三人判っています、その関係については部分的なもので、正確な関係性はまだ全部網羅できていません(資料1参照)。更に史料の発掘を進めなければいけないところです。

4 四つ目。伴林光平(1813～1864)、それから北島治房(1833～1921)、この二人について今までの研究史もあります。例えば、

昭和52年(1977)に西村公晴氏が『野山のなげき』(神社新報社)の中で三枝翁の足跡を追われています、実態がわかってきております。また、堀井壽郎氏が柳沢文庫に所蔵されている史料を分析されています。歌集が残っていましたが、これに『今村歌合集』という名前をつけて、これを分析された上で、大西源助・竹莊・宗恭という人物による歌集である事を示しています。彼は資料1の相関図の中で今村文吾との交友・社中であるという関係性で捉えています。大西源助が、天誅組の変が起ったあと身を隠し、急いで次の世代に家督を譲って、大阪の太融寺で身を隠したことを堀井氏は追求しておられます。さらに、改訂版『今村歌合集と伴林光平』(ペリカン社、2001年)により、今村歌合集の全部の内容について具体的に報告されております。他に、平成13年(2001)に鈴木純孝氏が『伴林光平の研究』(講談社出版サービスセンター、2001年)の中で、光平の動向を追っています。昭和19年(1944)に『伴林光平全集』が刊行され、かなりの史料を含んだ形で収集されていますが、鈴木氏は、年譜をより細かく補稿され、そのうえで伴林光平の動向や考え方について新しい史料も踏まえながら研究され、史料を解読し、発表されています。文吾と和歌を通じて関連する人びとについて、このような研究史がありますが、まだ不明な部分があり、もう少し追求しないと晩翠堂の形は見えないということです。

- 5 五つ目。最も悩ましい点は、文吾自身が記録を表していないということです。彼の思考などを直接うかがえる材料が非常に少ないということです。
- 6 六つ目。文吾は天誅組に関わったとされる史料が見出されていないことです。例えば軍資金をどのように送っていたのか、今現在確認でき



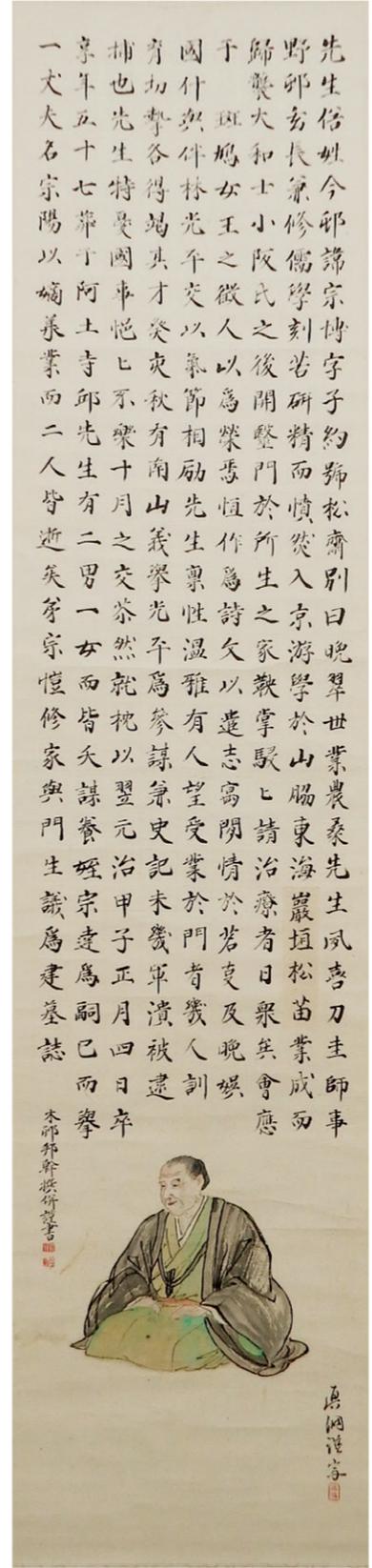
今村氏資料をもとに作成。但し()は俗名不明者

【資料3】今村氏系図

こういった一流の師匠につき、安堵村に帰ってからは、実際に自分も塾を開くことになり、資料2によると、大和士の小阪氏のあとを継ぎ、まず大和士の名跡を継ぐという役割を担います。そして、「開醫門（いもんを開く）」すなわち医者になる。治療を請うものが非常に多かったということが書かれていますし、加えて「斑鳩女王」（中宮寺門跡）に請われて侍医となる、とも書かれています。つまり、文吾は帰村してから次々と仕事に携わっていくわけですが、大和士に関して、お父さんの実家の影響が非常に大きいということが言えるかと思えます。

館に展示されています。後者の軸は、弟子の木村邦幹が略歴を書き、真洞（三枝翁）が肖像を描いています。この書に文吾の略歴が載っており、それを明治3年に墓碑として建てられた時にほぼ似た文章が刻まれています。よく似ていますが、一部文字が変わっているところがあります。軸の略歴の中に「巖垣松苗（注1）」とありますが、墓碑銘では「皆川淇園（注2）」とあります。軸の「巖垣松苗」という文字の箇所の下地の色が違っており、どうも貼り直して訂正しているようです。本来は墓碑に彫った「皆川淇園」が書いてあったものを、後に書き直していると考えられます。それと、文吾が学んだ師匠の名前が山脇東海（注3）であり、巖垣松苗であると書かれています。山脇東海は、江戸時代後期の医者で、京都では解剖、外科手術をした山脇一門であり、東海自身も外科手術をしております。それからもう一人、巖垣松苗。松苗は巖垣氏の後を継いで養子に入りましたが、公的な役にも就き、文吾は松苗に儒学を習います。著作に『国史略』があり、編者として名前が知られています。

【資料2】今村文吾略歴・肖像画像軸
(木村邦幹選書・真洞画)
(安堵町歴史民俗資料館所蔵)



「先生信姓今村諱宗博字子約號松齋別曰晚翠世業農桑先生夙喜刀圭師事野邨翁長兼修儒學刻苦研精而憤然入京游學於山脇東海巖垣松苗業成而歸齋大和士小阪氏之後開醫門於所生之家教掌駁詰治療者日衆兵會應國什與伴林光平交以氣節相勵先生稟性溫雅有人望受業於門者幾人訓育切摯各得竭其才突災秋有南山義學先生為參謀兼史記未幾軍潰被逮捕也先生特受國事悅不棄十月之交奈然就枕以翌元治甲子正月四日卒享年五十七葬于阿土寺邱先生有二男一女而皆夭諱養塚宗達為詞已而舉一丈夫名宗陽以嫡業業而二人皆逝矣孝宗愷修家與門生誦為建墓誌

以上、整理しますと

- ① 文吾という人物の経歴の点検
 - ② 今村家における今村文吾について、今一度押さえておく
 - ③ 斑鳩と安堵を一つのエリアと見たときの中宮寺を中心とした人々との関係性の整理
 - ④ 晩翠堂での活動内容、門人とのやりとり、医師として具体的にどんな活動をしていたか
 - ⑤ 今村社中の活動内容、天誅組と関わった伴林光平との交流
- これらを点検したうえで、どのようなことがわかるのかを見ていきたいと考えております。

今村文吾の経歴

文吾の経歴についてです。『大和人物志』（1909年刊）とは別に、「今村文吾墓碑銘（明治3年〔1870〕）」と「今村文吾略歴・肖像画像軸」（資料2）が一番基本になるものと思いますが、これらは今、安堵町歴史民俗資料

出身です。それから「今村」と名乗るようになりました。次の6世千助の娘お雪の婿に、坂堂家の専次が入りまして、ここで大和士との関わる契機となるわけです。

専次が大和士を継いでいたため、文吾も使命を受け、同じ大和士である小阪氏の跡を継ぐこととなります。今でも大和士の流鏑馬頭役を担った家が何軒かあります。文吾の兄弟で、七五三は越前といい、小阪氏に入家しています。小阪氏も大和士の株を引き継いでおり、養子となっているのですが、この名跡を継ぐために今村氏は努力を続けます。文吾の次の代に至っても同様で、受け継ぐ家格を維持するために非常に苦勞をしています。

文吾が小阪家に入ること、実は面白いことになっています。文吾と梅之助（梅之介）が小阪頼母の跡相続のために身請けする。そして宗旨改で、人別送りにより檀家に入ることが行われています。これが弘化3年（1846）のことです。父親から引き継いだ文吾は、弟の長男梅之助と一緒に今村氏ではなく小阪という名前を引き継ぐことになり、家を維持しつつ、流鏑馬の奉仕をつとめるという役割を負う事は、文吾にとって非常にウエイトが高かったと思われれます。

今村家における今村文吾について

そういった事情も抱えながら、文吾は医師として活動し、晩翠堂を開いて家を運営していくわけです。医業に関して実際の活動についてあまり具体的に知られていなかったのですが、ひとつは吉田栄治郎氏（公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会研究員）に見出された史料があります。（前掲拙著『知の系譜―今村三代・文吾・勤二・荒男―』「東安堵村諸事記抄（東安堵・

と書かれています。今村家では晩翠堂に関する史料は少なく、晩翠堂という言葉 キーワードに探してみると、『晩翠堂詩稿』という作品が残っています。これは門人の漢詩、和歌の作品を順番に書いており、文吾の作品も含まれています。作品についての評を伴林光平が加えてコメントを入れているものです。紙数は三紙六頁のもので、それ以外で晩翠堂という文字は和歌集の表紙に出ているものに限られ、実態がわかるような史料は乏しいといえます。

この晩翠堂塾の様子を伴林光平が歌に詠んでいます。『神相帖』という文久元年から二年ほど、光平が手放さず持っていた手帳の中に「学生おほく皆よく書を読み」など、学生らが一生懸命本を読んでいる姿を和歌にしています。これ以上の史料は見つかっていません。

では、この今村家がどういう形で運営され、文吾はどのように関わっていたのかということですが、天理大学附属天理図書館に今村家の史料が収蔵されています。「今村家族の事共」という文書の中で「本分之訳」という記録があり、その中で

「私共先代より本家・隠居之二ツ名前有之候得共、先祖より同家二而世躰向、世事共仕り居」

本家、隠居とも同じ家として運営していましたが、

「兄文吾生付ひが二而、学文を好み候故医師執行為仕、弟専次郎ハ愚直之生付ニ付、百姓為仕」

文吾と弟の専次郎について、兄は体が弱く医師を勤め、一方弟の専次郎は正直で一途なので、百姓を務めさせたと家内では捉えられていたのでしょう。また、

飽波神社所蔵文書、文政7年〔1824〕申正月〕で、文吾が死亡した捨て子の診療をした記録が残っています。文政9年（1826）の2月、捨て子がいたわけですが、その容体や症状について高取藩に報告するにあたって、医師としての診断を出しています。この時はただ文吾と名乗っているだけです。この中で「勇治倅」とありますが、実は勇治は専次の別名です。この時父の専次は村の庄屋を務めています。

また、今村家に残っていた史料で、『調和散配帳』^{ちやうわさんぱい帳}と言い、表紙に「今村調合局」とあります。薬を配布した記録帳で、文久2年（1862）のもんです。これを見てもみると、文吾と非常に関わりのあった人びとに薬を配っています。見開きのところに「宮様」とあり、中宮寺に処方しています。それから、中宮寺の家司として知られる上島掃部にも配っていることが見てとれます。それから「祖栄尼」という伴林光平の弟子で、當麻の受福寺に入る尼僧にも配った記載が出ています。薬を処方した実態を具体的に示すものであり、文吾が実際に医療に携わっていた姿を見ることができます。

もう一つご紹介しておきますと、同じ大和士であった、平群郡東勢野（現在の生駒郡三郷町勢野東あたり）の菅田一郎^{すがた いちろう}という人物です。文吾に医療の指導を受け師事したということが、彼が開業するにあたり書いた履歴書の中に記されています。文久元年（1861）から文吾に従って、ちょうど天誅組の変が始まった文久3年（1863）の8月までの2年6ヶ月、「醫術内科修行」したとあります。実際に医療に関わる中で、弟子をとりながら活動していた事がわかります。

次に晩翠堂の運営です。これについては、北畠治房が書いた『今村松齋翁略歴』の中に「和魂漢才」という四題の文字を掲げて、医業と儒学を教えた

「跡役専二郎相勤、并農業家事向共当躰専二郎名前二而、兄文吾江談じ之上仕居」

家内の経営関係に関して、農業のこと、家のこと、庄屋役を継ぐことについては、弟が兄の承認を得る形で携わっており、これが今村家の在り方のようにです。

そして文吾、専次郎家が「若本分別候時ハ、田畑其外共六五二五の割を以相分」という申し合わせがあったようです。

このあと、文吾が元治元年（1864）に亡くなって、息子の捨吉が継ぎますが、捨吉もわずか三年後に亡くなってしまいます。そうすると、今村家を継いだのが文吾の弟専次郎です。ところが、専次郎も明治4年（1871）に亡くなったため、その跡を継いだのが専次郎の次男である勤三でした。その結果、勤二が第9世になりました。天誅組の変などの幕末の動乱が終わり、新たに明治の時代となった時期、今村家の中で、跡目を継ぐことは大きな悩み事であったと考えられます。

今ご紹介した文書の中に、文吾の後、医師を継ぐため捨吉が京都へ勉強に行こうとしているという記載があるので、後継者を予定したものの早逝し、結果的には、捨吉が継ぐという形は実現しませんでした。こういった家の事情があり、加えて大和士を継承する使命もあり、今村家における文吾はこの二つをこなさなければいけない立場でした。医業もそれほど利の多いものでもなく、薬を買うのは非常に高価であり、本や器具も必要ですから、その入手によって借財がかなり高んだようです。専次郎が運営する農業や、それ以外の仕事による蓄財から補填をしていくという形でやりくりしていたことも具体的に記されています。苦心をしつつ、使命を乗り越えようと

していた事がうかがわれるのです。

「本分別し候時ハ」とありますが、これが現実になったと考えられるのが、勤三が継いだときです。文吾の跡相続のために家族が揃って了承します。大阪に逃れていたはずの大西滝蔵（竹荘）・宗恭も一緒に署名していますので、丹念に相談がされた上で作られた文章ではないかと思われれます。家族、親戚、小坂（小阪）親類とありますが、親類縁者の連名で証書が作られています。勤三が本家を継ぐこと、この時分家とは、六五・三五という割合でもって財産を分割すると決められたようです。奈良・春日若宮社で営まれるおん祭にかかわる「願主人随兵役一株」、これも分割する格好となっています。小坂（小阪）梅之助と一緒に小坂村に移り保有していたもの、これも文吾から相続した勤三が受け継ぎ譲り渡す旨の一筆が作られていますし、さらにその跡をとるために小坂（小阪）家の虎之助がもう一度株を継ぐべく、勤三の妹と結婚するという動きもありました。結果的には、勤三が跡をとることで解決を見たことが文書に記されています。

このように、幕末から明治の始めにかけて、後継は今村家にとって大事な問題であったということです。

中宮寺宮を中心とした人々の相関関係の整理

人間関係について触れておきます。斑鳩と安堵を一つのエリアとして捉えていくと、核になるのはやはり中宮寺であろうと考えています。晩翠堂の周辺をみると、中宮寺宮の存在があり、その周辺に上島掃部や平岡鳩平、ごく近くの東福寺に伴林がのちに中宮寺侍講として仕え、移住する、こういった形で、法隆寺を中心とした一つのエリアが出来上がっています。そこに佐々木

と考えられます。

ちなみに、中宮寺に仕えた人たちの中で、斑鳩に辰巳という家があります。慈尊院に入った心誠という人物が非常に関わりを持つことが史料にも出ています。明治時代以降には今村氏からも勤三の息女である慶倫が中宮寺に入っています。また、勤三の夫人は安堵町窪田の石田家から嫁いでいますが、その石田家から覚淳が中宮寺に入っています。明治時代以降も何らかの縁戚を通じて関係が続いています。

晩翠堂の活動と門人

晩翠堂が具体的にはどんな活動をしていたのか詳しくわからない、と申しましたが、文吾自身の草稿による分厚い帳面が残っています。その中で彼は漢詩を綴りながら、その時の様々な情勢、例えば地震が起こった事や、ロシアの船が着いたことなどを記しています。これらをもう少し分析をしながら、実態に近づくような情報を集めたいと考えているところです。

晩翠堂の門人について申し上げれば、五童子といわれる人物がいたことがわかっています。中村順三、浄尚（三枝翁）、梅之助、捨吉、貞二郎。伴林光平は彼らを「五童子」と呼んでいます。今でいう大学生から高校生、中学生にあたる年頃の若者であったようです。この頃に晩翠堂に加わっていたことは確かです。

伴林が彼らとやりとりした書状が、大阪府立図書館に所蔵されています。この手紙によると、若い子供たちへの教授について、伴林も非常に喜んでおり、弟子との再会を楽しみにしていたようです。この書状は、安政4年

信重も侍医として加わる。上島掃部と文吾が同じ巖垣松苗の門下であったことから、文吾も侍医として推薦され関わっていきます。大西宗恭は西安堵で、晩翠堂と非常に近いところにありますが、のちに紹介する今村社中では古くから参加している人物でもあります。地元では庄屋を務めています。また、晩翠堂の門人で、真宗寺院の若い僧である浄尚（変名・青木精一郎、三枝翁）は、天誅組に加わっています。歌では浄尚、祥磨という名前を名乗りますが、今村文吾の肖像を描いた真洞という名前も名乗っています。これがパークス事件を起こすことになった三枝翁の門人としての姿です。椎木村という隣の郡山藩領の村出身で、今村邸とも非常に近い場所がありました。

手紙の中で、吐田の毛利喜右衛門の名前が見られます。元々斑鳩の大庄屋、清水氏の出身で、吐田の毛利氏の跡を継ぐ形で人家しています。天誅組を討つ郡山藩と一緒に付き随って現地へ赴き、密かに天誅組に支援をしました。その後、支援が発覚したため自ら毒薬を飲んで亡くなっています。

毛利氏は（安堵町周辺の）大和川を越えすぐの地に所在していましたが、晩翠堂とだけ関わっていたか、史料上では確認ができていません。

何故こういうエリアとして考えるのかということです。中宮寺門跡の存在が大きいです。孝明天皇の養女であった点で、宮中と直接やりとりが可能な存在であることが大きな理由です。この中宮寺宮を中心とした動きがあるであろうし、それに関係する人たちが存在するということです。ちなみに、伴林が奈良奉行所に捕らえられて、罪の軽減配慮についての上申書が中宮寺から出されていますが、結果的にそれが逆効果になったようです。

そういった物を言える存在である中宮寺が、このエリアでの核になったか（1857）の5月とあります。晩翠堂が開かれたのが天保3年（1832）ですが、具体的な活動がみられる様になるのもこの頃と考えられます。

貞二郎というのが誰なのか。伴林光平が安政6年（1859）に、門人が詠んだ歌を集めて作った「垣内摘草」という和歌集があります。その中に「貞」と書いている人物の歌がありました。貞が地元東安堵の人だということがわかっていきましたが、最近、宮島氏であるということがわかりました。近辺の人たちが寄り集まって運営された塾たといえるでしょう。また、中村順三という人は天理樸本出身の人物で、このメンバー中で少し年齢が高いようですが、門人の筆頭として非常によく動いた人でした。中村順三についてはもう少し調査が必要です。

和歌の会の詠草活動、伴林光平との交流について

もう一つ、和歌の会の実態はどうなのか、ということですが、詠草活動、それから伴林光平に指導を受けたことが添削記事からうかがえます。堀井壽郎氏の成果もあり、内容も紹介されています。安堵町歴史民俗資料館に500近い和歌集、和歌に関する史料が残っていますが、その内容を分析することで、動きを見てまいります。

短冊は489点で、崇阿という人物が50点を越えております。それから、三陰顕成という人物がそのおよそ半分の27の短冊が残っています。顕成は大和高田の照光寺の住持であった人物で、香川景樹派の歌を詠む師匠でした。光平は1点ですが、何故1点かといえ、彼の作品を今村家で屏風などに作り替えているため、短冊の形として残っているのが少ないと考えています。なお、崇阿、三陰顕成、伴林光平の三人は指導者であるということが、この

記録類からわかります。その他、名前では誰か判明しない人物もいますが、江戸期のは少なくとも219点あるということです。なお、この中に出てくる貞治は宮島氏で、今村社中で一緒に活動していました。

明治以降では、勤三の関係者が詠んだ資料がずいぶん残っていました。三蔭顕遠は三蔭顕成の息子です。光平から指導を受けられなくなったあとは、顕遠より教えを受けていたことがわかります。今村富子は、小坂（小阪）氏から今村家を継ぎ、また小坂（小阪）の名跡を継ごうとした人物の一人ですが、非常に和歌を熱心に学んでいる姿が窺えます。田中清夫は医者で、元々は天理の岩室に在住した人物です。三枝翁がしばらく天誅組から離れて鳥取で潜伏したあと、再び戻ってきたときに堺で彼を匿っていた人物です。明治期に入り、三枝翁の名誉回復のための文書を記したのもこの人物で、一緒に和歌の会を催していたのです。他、中宮寺門跡の作品もありますし、北畠治房の作品も確認できました。

和歌と漢詩、これも江戸期、明治以降という大まかな分けをすると500点を越える中で140点余りが江戸期のものであることがわかってきました。その判者から指導者であるとわかってきたものが73点です。月次和歌の中で崇阿、三蔭顕成、伴林が関わっています。記録類が帳簿、冊子として残っています。それから、『晩翠堂詩稿』。これは短い作品ですが1点、伴林が宗達、梅之助のために自ら書いたという手本が残っています。文吾が書いた草稿帳面や、文吾の息子・捨吉の記録、甥の梅之助の記録、三枝翁は9点もの冊子と、歌の草稿文が残されています。今村宗敬・宗経という人物は特定できていませんが、大和土に関係する坂堂氏の系統だと考えています。地元の人では大宝寺の住僧や、西安堵の大西氏、現在の北葛城郡広陵町南郷の和田氏と関係あったという点も、これらの和歌や記録から窺われますし、

谷三山の門人としての姿は見えていません。さらにもう少し追求する必要があります。門人たちを具体的に見ていかなければ、はつきりしないだろうと考えています。

斑鳩・安堵エリア内での関係性は、中宮寺を中心にした人びとを見ていくことでわかっていくこともあるのではないかと考えています。また晩翠堂の姿、和歌についての情報をさらに加え、実態に迫っていけたらと考えています。

(了)

江戸時代から何らかの関係があったと考えられます。

明治以降では、文吾の略歴を記した弟子の木村邦幹が歌の指導者となって、今村家で和歌の会を催しています。顕成の息子三蔭顕遠が判者となり指導する形で関わりながら、活動を継続していたのです。まとまって残っていたのが、文吾が明治42年に正五位を追贈される際の祝賀会に寄せられた和歌や文書です。明治以降も、今村邸では後世まで和歌の活動が活発に行われていたことがわかります。学問塾としての晩翠堂と、和歌の社中としての活動と両者に連動があったのかどうか、このメンバーから推察すれば重複する部分が非常に多くあり、和歌を教えることも塾の講義内容に含まれていたということです。年齢の高い人はあまり塾には加わらず、和歌の活動のみ参加したと記録から考えられます。

今村社中という名前はこれらの冊子の中には見出されませんでした。便宜的に「今村歌合集」と堀井氏が名付けましたが、安堵社中などの名前は江戸時代の記録には出てきません。そう名乗っていなかったからでしょうか。明治になってからは榎木社中、新葉社、松の舎社中といった名前がみられ活動した記録が沢山あります。この中には小坂（小阪）家を継いだ勤三の兄弟・万三や、富子、富本憲吉の父豊吉といった人たちも加わりながら、勤三は晩年まで作歌を続けたようです。

このような姿が今村邸での詠草活動の有り様であったということです。

まとめと課題

探るといふまでには至りませんでした。今村家の姿を見ても、やはり

【注1】 1774-1849。江戸末期の儒学者。字は長等。東園または謙亭と号した。京都の儒学者西尾杏庵の子で、のちに巖垣竜溪の養子となった。国史にも精通。

養父巖垣竜溪の跡を継ぎ、大舍人助（おおとねりのすけ）・音博士となり、竜溪が創立した遵古堂で教えた。著作に「国史略」「東園百絶」など。

【注2】 1735-1807。江戸中期の京都の儒学者。名は愿（げん）。字は伯恭。漢字の字義と易学を研究し、開物学を提唱。また、漢詩文・書画にも優れ、晩年、私塾弘道館を開く。著作に「名疇」「易学開物」「易原」など。

【注3】 1757-1834。江戸末期の京都の医者。日本最初の人体解剖記録『蔵志』を著した山脇東洋の孫で、東洋の次男山脇東門の嗣子。自身も家学を継ぎ、解剖経験を重ねた。

【注4】 1768-1843。江戸後期の歌人。鳥取出身。号は桂園。香川景柄の養子。小沢蘆庵に師事。賀茂真淵らの復古主義歌学を否定、純粹感情を重んじる桂園派を打ち立てた。著作に歌集「桂園一枝」、歌論「新学異見」「古今和歌集正義」など。



はしもと・きみ

1962年奈良県生まれ。大谷大学文学部史学科卒。1992年安堵町職員。2011年から2022年まで安堵町歴史民俗資料館館長。2016年より奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員。『安堵風土記—安堵の歴史点描』（共著・安堵町、2019）『知の系譜—今村三代 文吾・勤三・荒男—』（共著・安堵町、2019）